

7月29日未明、冷たい横殴りの雨のなか、先々週ご紹介した遠位型ミオパチー患者である中岡亜希さんを中心に、40人ものボランティアがまるで巡礼者の列のようにヘッドランプで足元を照らし、暗闇のなか、富士山頂を目指していた。

予報では29日の昼ごろから風速40に近い暴風雨になるという。そのため僕たちは午前2時30分に富士山9合目の万年雪山荘を出発した。

次第に風が強まり、歩きながらいつ引き返そうかと考えていたとき、車イスに乗った中岡さんが「頂上までもう少しだ、引っ張れー」と風雨に負けない声を張り上げる。すると全員が「おー」と応えた。

彼女の気力が隊全体の士気を高めている。中岡さんを隊長にしてよかったと思った瞬間だ。

特定非営利活動法人（NPO法人）「希少難病患者支援事務局（SORD）」代表の小泉二郎さんとの打ち合わせで、去年は悪天候のためあきらめた富士山にもう一度挑むのに必要なのは、中岡さん自身の山に対する思いではないかと考えた。隊長に必要な

資質は頂上まで登る気持ちと隊員の一人ひとりに気を使う視野の広さと優しさ、そして何よりも底抜けに明るいこと。すべてにおいて彼女は申し分ない。

彼女が隊長になることによって、

隊員や自分自身のコンディション、登山続行、撤退の決断など多くの責任が生まれる。もちろん、登山の知識や技術などはアドバイスするが、こうした責任感が富士登山をただ単に引っ張り上げられる障害者から自らの意志で登る山へと変える。

中岡さんは人一倍気を使う人間で、ケアする人に対しても自分が負担になることに負い目を感じ、やる前にあきらめてしまう癖がついていたという。

その背中を押してくれたのが3年前、彼女が塾で教えていた子供たちだ。彼女は子供たちと長野県の南アルプスにある奥峰に登ったときに見たご来光が忘れられず、「今度は富士山のご来光を見よう」と何気なく約束したのが始まりであった。

その子供たちが今や彼女の手や足となり、常に細心の注意を払いながら、雨や風に負けずに文句一つ言うことなく、近くでサポートしている。

身体のコまで凍える辛い雨のなか、3年越しでかなった富士山登頂。健常者でも厳しいコンディションであったが、中岡さんは見事、隊の気持ちをひとつにまとめ大きな可能性の扉を開いたのだった。



富士山での中岡さん（前列左から

2人目）と子供たち